



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	平成19年度北海道大学教育ワークショップ報告
Author(s)	西森, 敏之; 安藤, 厚; 細川, 敏幸 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 16, 77-100
Issue Date	2008-12
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.16.77
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38790
Type	departmental bulletin paper
File Information	No1607.pdf



平成 19 年度北海道大学教育ワークショップ報告

西森 敏之^{1)*}, 安藤 厚²⁾, 細川 敏幸¹⁾,
山岸 みどり¹⁾, 鈴木 誠¹⁾, 池田 文人¹⁾

¹⁾ 北海道大学高等教育機能開発総合センター, ²⁾ 北海道大学大学院文学研究科

A Report on the 2007 Hokkaido University Workshops on Education

Toshiyuki Nishimori,^{1)**} Atsushi Ando,²⁾ Toshiyuki Hosokawa,¹⁾
Midori Yamagishi,¹⁾ Makoto Suzuki¹⁾ and Fumihito Ikeda¹⁾

¹⁾ Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University,

²⁾ Graduate School of Letters, Hokkaido University

Abstract — In 2007, Hokkaido University made a change in the system of faculty-development activities. Before the change, the old system consisted of (a) a one-day course for teaching assistants in April, (b) a one-day course for new teaching staff members in June, and (c) a two-day workshop about education for teaching staff members in November. In the new system the one-day course in (b) is replaced by a two-day workshop quite similar to the one in (c). The two-day workshop in (c) was introduced in 1998 to improve the education of Hokkaido University and it has been held once a year since. The purpose of this report is to explain what was done in the two-day workshops in 2007.

The first two-day workshop (in June) had 39 participants from all over Hokkaido University, and the second one (in November) had 28 participants from all over Hokkaido University and 6 participants from 6 other institutions. The main theme of this year's workshops was to plan courses respecting the requirements for credits more rigidly. The reason for the choice of this theme was based on the observation that the traditional education system of universities in Japan did not strictly respect the convention that a credit corresponds to 45 hours of study by students, including lectures, preparations, reviews, assignments, etc. Each of the workshops had (1) three sessions about planning of courses, each of which consisted of mini-lectures, small group discussions and a general discussion, and (2) two lectures, one about the purpose of faculty development and one about the meaning of 'respecting the requirements for credits more strictly.' Furthermore, the second workshop (in November) had an additional lecture about the spirit inherited from Dr. William Clark of the Sapporo Agricultural College. The main contents of this report are the syllabi of the courses worked out in the workshops.

(Received on March 31, 2008)

^{*}) 連絡先: 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター

^{**}) Correspondence: Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University, Sapporo, 060-0817, Japan

1. はじめに

北海道大学では、高等教育機能開発総合センター 高等教育開発研究部が主催して行う全学的ファカルティ・デベロップメントの構成を、2007 年度から変更した。

変更前は、4 月の「TA 研修会」、6 月の「新任教員研修会」、11 月の「北海道大学教育ワークショップ」の 3 つの研修会が行われていた。

4 月の「TA 研修会」は、1 学期が始まる直前に行う全学教育のティーチングアシスタントに対する 1 日コースの研修会であり、研修は 1 回受ければよいということで、200 ～ 240 名程度が参加する。午前中は大講堂で「TA のあり方」、「北海道大学の全学教育」、「TA の体験談」などが話題になる。午後は 2007 年度の例でいえば「一般教育演習」、「一般教育演習／フィールド」、「講義」、「論文指導」、「情報学」、「英語 II オンライン授業」、「英語 II 以外の英語の授業」、「中国語」、「文系基礎科目」、「心理学実験」、

「理系基礎科目」、「自然化学実験」の 12 の分科会に分かれて行われている。

「新任教員研修会」は北海道大学に 1 年以内に赴任してきた新任教員が対象とする 1 日コースの研修会であり、4 ～ 5 本の講演と 1 セッションのグループ討論の組み合わせである。2006 年度のプログラムを表 1 に示す。

さて 2007 年度からの変更点であるが、6 月の 1 日コースの「新任教員研修会」の代わりに、新任教員を主な対象として、1 泊 2 日コースの「北海道大学教育ワークショップ」を行うということである。11 月に行う「北海道大学教育ワークショップ」も新任教員を主な対象とすることにして、新任教員に対する研修を充実させる試みである。

以上のような経緯で、2007 年度より「北海道大学教育ワークショップ」が 1 年に 2 度行われることになった。

この報告は、2007 年度に行われた 2 回の「北海道大学教育ワークショップ」で得られた成果（すなわち、5 グループに分けられた参加者によりグルー

表 1. 平成 18 年度 新任教員研修会プログラム

日時：2006 年 6 月 1 日（木） 午前 9 時 30 分～午後 3 時 20 分	
会場：情報教育館 3F スタジオ型多目的中講義室（主会場）	
..... 受付（9:15 — 9:25）	
9:30 挨拶	佐伯 浩（副学長）
9:35 「北海道大学の教育理念形成の歴史」	藤田正一（獣医学研究科教授，総合博物館長）
10:05 「平成 18 年度以降の教育課程— GPA と単位の実質化」	安藤 厚（文学研究科教授，高等教育開発研究部長）
..... 休憩（10:35 — 10:55）	
10:55 「北海道大学における知的財産の取り扱いについて」	鈴木隆一（知的財産戦略部長）
11:20 「グループ討論の方法について」	細川敏幸（高等教育機能開発総合センター助教授）
11:40 ◇グループ討論の打ち合わせ	
..... 昼休み（12:00 — 13:00）	
13:00 「大学生の心のケアについて」	朝倉 聡（保健管理センター講師）
13:30 ◇グループ討論およびパネル討論「単位の実質化と教員の倫理綱領」	
司会：細川 敏幸 パネリスト：各グループのリーダー	
コメンテーター：榎戸武揚（工学研究科教授），新田孝彦（文学研究科教授），	
大畑 昇（歯学研究科教授）	
15:20 散会	

づごとに作成された新しい科目のシラバス)を記録しておくことである。

2. 2007 年 6 月の「北海道大学教育ワークショップ」

2.1 参加者、プログラムなど

2007 年 6 月 8 日(金)、9 日(土)の両日、「単位の実質化を目指して」というテーマで、奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北乃湯)で、第 10 回目の北海道大学教育ワークショップ(FD)が行われた。

今回の参加者は、本学の研究科及び研究所等から(主に北大に着任後 5 年以内の若手)教員 39 名に、世話人、講師、事務職員など合わせて総勢 46 名であった。

今回のワークショップのテーマは、「単位の実質化を目指して」であるが、2006 年度から一年次に導入された「履修単位の上限設定」によって、1 科

目当たりに学生が割ける時間が増加し、「2 単位は 90 時間の学習に相当する」という国際基準を念頭において、「単位の実質化」を実現することは全学教育における現時点での最重要課題となっているという背景がある。

1 日目の 6 月 8 日は、遅刻者もなく予定通り学術交流会館前から研修会場の奈井江温泉行きのバスが出発し、高速道路に乗ってから、例年のように、参加者の自己紹介で研修会が和やかな雰囲気ではじまった。表 2 のプログラムのよう、会場到着後早朝と一緒に記念写真(写真 1)を撮り、総長の挨拶(写真 2)ののち、ミニ講義「FD の目的と意義」、「GPA と単位の上限設定について」(写真 3)があつて、昼食となった。

昼食後、研修のオリエンテーションとして、講演会でなく参加者がグループ作業をして成果を上げるという意味で「ワークショップ」という用語を使っていることを説明し、作業がスムーズに進行するために重要なアイスブレイキングを、グループ名を決めるとか小さな課題をいくつかグループ作業で行

写真 1. 記念写真

表 2. 第 10 回 (平成 19 年 6 月) の北海道大学教育ワークショップのプログラム

2007 年 6 月 8 日 (金)

8:30	学術交流会館 1 階ロビー集合・受付
8:45	バス 出発 研修開始：オリエンテーション挨拶
9:55	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真
10:00	挨拶「FD 実施にあたって」(20 分) (佐伯総長)
10:25	ミニレクチャー「FD の目的と意義」(25 分 + 質問 5 分)
10:55	休憩 (15 分)
11:10	ミニレクチャー「GPA と単位の上限設定について」(40 分 + 質問 5 分)
12:00	昼食 60 分
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング (30 分)
13:30	ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」(30 分)
14:00	グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
14:10	グループ作業 I「授業の設計 1：科目名・目標の設定」(60 分)
15:10	発表・全体討論 (50 分)
16:00	休憩 (20 分)
16:20	ミニレクチャー「教育方略」「学生参加型授業の例」(30 分)
16:50	グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
17:00	グループ作業 II「授業の設計 2：(目標の手直しと) 方略」(60 分)
18:00	発表・全体討論 (50 分)
18:50	夕食 (40 分)
19:30	休憩 (風呂など) (50 分)
20:20	懇親会

2007 年 6 月 9 日 (土)

7:30	朝食
8:30	ミニレクチャー「評価」(30 分)
9:00	グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
9:10	グループ作業 III「授業の設計 3：(方略の手直しと) 評価」(60 分)
10:10	発表・全体討論 (50 分) - 休憩 (10 分) -
11:10	参加者の個人的感想や意見 (50 分)
12:00	昼食 (60 分)
13:00	バス出発
14:30	J R 札幌駅北口到着

写真 2. 佐伯浩総長の挨拶

写真 3. 安藤教授の講義

写真 4. アイスブレイキング

写真 5. 西森教授のミニ講義

写真 6. グループ討論

写真 7. グループ討論内容の発表

い、本格的なグループ作業に入るための準備を行った (写真 4)。

ワークショップのメインプログラムでは、参加者を 5 グループに分け、単位の実質化を実現するための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題で、グループ作業を行った。

授業の設計は、3 回のセッションに分けられ、(I) 科目名と目標、(II) 方略 (15 回分の授業内容)、(III) 「評価基準」、の順に行われた。おのおののセッションは、

- (1) 30 分程度のミニ講義 (写真 5)、
 - (2) 小グループでの 60 分の討論 (写真 6)、
 - (3) 全員での討論の成果の発表会 (写真 7)、
- という 3 つの部分からなっている。

より具体的には、参加者全員を名簿順に A, B, C, D, E, A, B, C, D, E, ... のようにグループ分けし、各グループがさまざまな専門の人たちからなるようにした。それぞれのグループは、あらかじめ指定されている

- A: 一般教育演習 (学生数 20)
- B: 一般教育演習 (学生数 20)
- C: 一般教育演習 (学生数 20)
- D: 特別講義 (6 名の学部長が等が講師)
- E: 総合科目 (6 名程度の講師が交代で行う)

のような設定の科目を設計するという課題に挑んだ。ただし、単位の実質化を実現するような仕掛けを組み込むということが要求されている。

1 日目は、午後に、「科目名と目標」と「方略 (15 回分の授業内容)」についてのグループ討論を行い、夕食後は休憩を取ってから懇親会を行った。

2 日目の午前に、「評価基準」についてのグループ討論を行い、1 日目と合わせて 3 回のセッションに分けてシラバスを作成した。

2.2 プロダクト

6 月のワークショップで得られたプロダクト (シラバス) を紹介することにして、まず目次代わりに科目名のみを紹介しておく。

<グループ A>

一般教育演習 「世界の食について考える一生産・分配・文化・健康の視点から」

<グループ B>

一般教育演習 「バイオエタノールは本当に環境にやさしいのか」

<グループ C>

一般教育演習 「北大キャンパスにうごめく命 (ムシからヒトまで)」

<グループ D>

特別講義 「学問とは何か～その相互関連と社会でのつながり」

<グループ E>

特別講義 「環境問題を見つめ直す」

第 10 回 (2007 年 6 月) 教育ワークショップのプロダクト

(以下は、各グループの提出した成果である OHP と記録を参照して、報告者がまとめたものである)

(2007 年 6 月) グループ A のシラバス

石川 明人 (文学研究科), 宇田 忠司 (経済学研究科), 大島 昇平 (歯学研究科),
大田 寛 (獣医学研究科), 工藤 秀明 (水産科学研究院), 山田 修平 (先端生命科学研究院),
田中 直伸 (薬学研究科), 下山 宏 (低温科学研究所)

＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「世界の食について考える—生産・分配・文化・健康の視点から—」

【一般目標】

私たちは、毎日の「食べ物」あるいは「食べるという営み」について実はあまりよく知らないでいる。そうした自覚を念頭に、農学、経済学、宗教文化、医学・薬学などの観点から「食」の全体について学際的な知識を獲得し、同時に現状に対する建設的意見を持つことができるようにする。

【行動目標】

- ・ 文献や情報の“収集法”を身につける。
- ・ 「持続可能な食糧生産」がどのような事であるか説明ができる。
- ・ 「食糧分配・食の平等」がどのようなことか説明ができる。
- ・ 「食物と宗教・文化」がどのようなことか説明ができる。
- ・ 「薬と薬品」がどのようなことか説明ができる。
- ・ Power Point を用いたプレゼンテーションを行うことができる。
- ・ 他者の報告・発表を建設的に評価を行うことができる。
- ・ レポート作成法を身につける。

＜方略＞

【授業形態】 全体を 4 グループに分けてグループ単位で作業を行う。

【授業設計】

1. ガイダンス レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方
2. 文献収集方法の修得（リテラシー教育）
3. 講義：持続可能な食糧生産～個人による情報収集（ミニレポート）
4. ディスカッション・作業
5. 各班発表
6. 講義 2: 食物と宗教・文化～個人による情報収集（ミニレポート）
7. ディスカッション・作業
8. 各班発表（質疑応答・評価）
9. 講義 3: 食糧分配・食の平等～個人による情報収集（ミニレポート）
10. ディスカッション・作業
11. 各班発表（質疑応答・評価）
12. 講義 4: 薬と薬品～個人による情報収集（ミニレポート）
13. ディスカッション・作業
14. 各班発表（質疑応答・評価）
15. ラップアップ、レポートの提出

【最終レポート】

食と健康に関するテーマを選択し個人で情報収集・分析・記述という一連のプロセスを行い、レポートとして提出する。

<評価>

最終レポート	20%
プレゼンテーション	
報告による評価	20%
学生による評価	20%
各グループのディスカッションの時に用いる情報収集のミニレポート	
.....	10 × 4=40%
原則として3回以上欠席したものは単位を取得できない。	

<メモ>

1. 講義～情報収集, ミニレポート作成
2. グループディスカッション～発表準備
3. 各班発表～質疑応答, 評価, 評価用チェックシート (自己評価)
4. 評価のフィードバック, 講義

(2007 年 6 月) グループ B のシラバス

森本 琢 (文学研究科), 鍋島 孝子 (メディア・コミュニケーション研究院),
 友永 章雄 (歯学研究科), 大崎 智弘 (獣医学研究科), 清水 宗敬 (水産科学研究院),
 小谷 友也 (先端生命科学研究院), 森川 守 (病院), 藤原 英樹 (電子科学研究所)

<科目設定>

【科目名】 一般教育演習「バイオエタノールは本当に環境にやさしいのか」

【一般目標】

環境保全と石油依存社会の両者の立場と現状を理解し, 議論を深めることを通して問題解決能力を身に付けることを目的にする。

【行動目標】

- ・ 資源に関する情報・知識を得ることができる。(資源量・消費量・環境など)
- ・ 得た知識から自分達から調査する能力を身につける。
- ・ 知識と調査したデータからディベート石油依存と環境保持派で, グループを入れ替え, 両者の立場を経験して多面的に問題を解決する

<方略>

【授業設計】

- 1～3. ガイダンス テーマ 1: 「人類は石油に依存しないと生きて行けないのか」
4. グループ学習, 意見のとりまとめ (調査方法とレポートの書き方, 発表の仕方)

5. グループ発表, ディスカッション
6. 講義, 総括 テーマ 2: 「自然は未来からのあずかり物」
- 7～9. 同上 テーマ 3: 「環境技術は地球を救えるか」
- 10～12. 同上
13. 総合討論の仕方 (プロジェクト立案)
- 14, 15. 総合討論

<評価>

1. 調査能力 (理解)30%
 - レポート 教員 (15%)
 - 学生 (自己評価) (15%)
2. 発表能力30%
 - 発表 教員 (15%)
 - 学生 (15%)
3. 問題解決能力40%
 - ディスカッション 教員 (20%)
 - 学生 (20%)
4. その他 発表内容が良かったグループに加点—学生同士の投票

(2007 年 6 月) グループ C のシラバス

吉田 広志 (法学研究科), 飯田 真紀 (メディア・コミュニケーション研究院),
 秦 浩信 (歯学研究科), 湊 真一 (情報科学研究科), 森川 正章 (地球環境科学研究所),
 澤田 圭 (農学研究科), 小野澤 真弘 (病院), Goto Derek (電子科学研究所)

<科目設定>

【科目名】 一般教育演習「北大キャンパスにうごめく命 (ムシからヒトまで)」

【一般目標】

北大のキャンパスは日本一豊かな自然環境に恵まれている。われわれをとりまく身近な生き物の種類や生態 (生きざま) を取り上げ, 生活環境・文化・歴史を学び, 北大の理念にふさわしい世界観を身につける。

【行動目標】

- 1.ex. 自ら取材した北大キャンパスの植物・昆虫の名前が言えるようになる。(ex. 生物多様性の理解)
2. 自ら情報収集する能力を身につける。(対人, 文献, フィールド) 収集した情報を分析し, 取捨選択する能力を身につける。
3. 学外者北大キャンパスの自然の魅力を伝えることができる。(プレゼンテーション能力)

その結果

北大の理念にふさわしい世界観を養う。

北大製としてのアイデンティティの確立，他者への理解

<方略>

- ・ 総論 キャンパス案内
- ・ キャンパス内の開発の歴史
- ・ フィールドワーク 植物・昆虫写真撮影しプレゼン
- ・ 北大で見られる野生動物，飼育動物
- ・ 環境と生物の相互作用
- ・ ポプラ並木の再生プラン（ジンパ，ラーメン，スープカレー）
- ・ 北大生の言語生態
- ・ 北大ブランド，農畜産物
- ・ まとめ 総評

<評価>

【形成的評価】

- ・ アンケート（初回）
- ・ 発表リハーサル
- ・ 可能なら学外者の前で発表（HP に公開）
- ・ 優秀プレゼンテーションの表彰（HP に公開）
- ・ 翌年の教材とする。

【成績評価】

- | | |
|--------------------|-------|
| 1. プレゼンテーション | 50% |
| 教官評価 | (25%) |
| 学生評価 | (25%) |
| 2. 評価能力 | 20% |
| 3. 試験 | 20% |
| 4. 授業に対する貢献 | 10% |
| ○ 出席回数（欠席は 3 回まで） | |

(2007 年 6 月) グループ D のシラバス

真壁 仁（法学研究科），横澤 宏一（医学部），土家 琢磨（工学研究科），
 田中 孝之（情報科学研究科），野田 隆史（地球環境科学研究所），小池 聡（農学研究院），
 藤田 恵里（病院），張 陔 峰（遺伝子病制御研究所）

<科目設定>

【科目名】 特別講義「学問とは何か～その相互関連と社会でのつながり」

【一般目標】

一見無関係に見える学問領域の間にも実は深い関連性がある。また、学問と応用を切り離して考えることは出来ない。現在、人類が直面する様々な問題を解決するためにも多面的な視点が必要である。この特別講義では各学問的領域の内容を知るだけでなく、学問領域の相互関係や社会とのつながりを知る

【行動目標】

- (1) 学問領域間の相互関係を事例を基にして理解し、自身の学問領域について考察できる。
- (2) 学問と社会との関係を基にして理解し、自身の学問領域について社会に与える影響を考察できる。

<方略>

1. ガイダンス (1 週)
2. 学問の体系と歴史 (1 週)
3. 学問同士のつながり (各 2 週)
 - (1) 医学と工学
 - (2) 法律と文学
 - (3) 環境と経済
4. 社会と学問のつながり (各 2 週)
 - (1) 平和
 - (2) 人口
 - (3) 環境
5. 総合討論 (1 週)

アンケート

レポート (自分の学問分野と他の分野とのかかわり)

レポート (自分の学問分野が社会に与える影響)

- ・ 1 では、レポートの書き方のテキストを配布する。
- ・ 2 ～ 4 では、各階でテキストを用意する。
- ・ 1 ～ 4 は講義、5 はパネル討論を行う。
- ・ レポート提出 (プレレポート 1 回, レポート 2 回)
- ・ 毎回コメントシートを提出, 出席確認も兼ねる

<評価>

- ・ すべてのレポート提出と 10 回以上の出席を評価の最低条件とする。
- ・ 出席: アンケートおよびコメントシートの提出
- ・ レポートは校正と内容の双方を評価対象とする。

(2007 年 6 月) グループ E のシラバス

須賀 宣仁 (経済学研究科), 林 裕子 (医学部), 寺尾 晶 (獣医学研究科),
 齋藤 晋聖 (情報科学研究科), 南谷 哲宏 (理学研究院), 齋藤 望 (農学研究院),
 渡辺 力 (低温科学研究所)

<科目設定>

【科目名】 特別講義「環境問題を見つめ直す」

【一般目標】

人間は様々な活動を通じて、自然環境を自分達の都合のよいように作りかえてきた。その結果、たとえば地球温暖化や環境汚染などの環境破壊が進み、われわれの生活をおびやかしています。この講義では、「環境問題」といわれているものの実体を改めて確認するとともに、持続可能な社会システムの構築に向けた幅広い支店をやしなう。

【行動目標】

- ・ 環境問題の現状を理解する。
- ・ 取り組みの背景と内容を理解する。
- ・ 自分の意見をもつ。

<方略>

1～3 回目: ガイダンス

地球温暖化問題の現状

4～6 回目: 大気汚染・水質汚染・土壌汚染などの環境汚染の現状

7～9 回目: 環境指標としての野生動物の現状

10～12 回目: 環境保全の取り組みの現状

13～15 回目: 経済学的視点から見た環境問題

総括

<評価>

出席点 50%

レポート 50%

◆各教官ごとに 20 点満点。計 100 点。

◆出席 1～3 回目: カードで出欠 2 回目: レポート提出 (終了 2 日後)

◆レポート・各到達目標が明記されているか?

- ・ 重要なキーワードを入れ、ロジカルに書かれているか?
- ・ 手書きであること。
- ・ A4 用紙表, 裏

3. 2007 年 11 月の「北海道大学教育ワークショップ」

3.1 参加者、プログラムなど

2007 年 11 月 9 日（金）、10 日（土）の両日、「単位の実質化を目指して」というテーマで、奈井江町農業改善センター（奈井江温泉ホテル北乃湯）で、2007 年度第 2 回目のワークショップとして、「第 11 回北海道大学教育ワークショップ（FD）」が行われた。

今回の参加者は、本学の研究科及び研究所等から（主に北大に着任後 5 年以内の若手）教員 30 名に、他大学／高専から 6 名の教員、さらに世話人、講師、事務職員など合わせて総勢 45 名であった。

今回のワークショップのテーマは、2007 年度第 1 回目のワークショップの同じく、「単位の実質化を目指して」である。

プログラムは表 3 の通りであり、第 10 回との大きな相違点は、夕食後に、藤田正一獣医学部教授の講演「クラーク博士とその教え子たちの言葉から」

を付け加えたことである。その他の変更点としては、佐伯浩総長の都合が悪く、代理として脇田稔副学長（高等教育機能開発総合センター長）に挨拶をしていただいたことと、グループ E の課題を「特別講義」の代わりに「大学院共通共通授業」にかえたことがある。

いつものようにワークショップは進行していった。

3.2 プロダクト

11 月のワークショップで得られたプロダクト（シラバス）を紹介することにして、まず目次代わりに科目名のみを紹介しておく。

<グループ A>

一般教育演習 「世界の食について考える—生産・分配・文化・健康の視点から—」

<グループ B>

一般教育演習 「バイオエタノールは本当に環境にやさしいのか」

<グループ C>

表 3. 第 11 回 (平成 19 年 11 月) の北海道大学教育ワークショップのプログラム

2007 年 11 月 9 日 (金)

8:15	クラーク会館 1 階ロビー集合・受付
8:30	バス 出発 研修開始:オリエンテーション挨拶
9:45	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着, 玄関前で記念写真
9:55	挨拶「FD 実施にあたって」(20 分)(脇田稔副学長)
10:20	ミニレクチャー「FD の目的と意義」(25 分 + 質問 5 分)
10:50	休憩 (15 分)
11:05	ミニレクチャー「単位の実質化について」(40 分 + 質問 5 分)
12:00	昼食 60 分
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング (30 分)
13:30	ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」(30 分)
14:00	グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
14:10	グループ作業 I「授業の設計 1: 科目名・目標の設定」(60 分)
15:10	発表・全体討論 (50 分)
16:00	休憩 (20 分)
16:20	ミニレクチャー「教育方略」(20 分)「学習ポートフォリオ」(10 分)
16:50	グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
17:00	グループ作業 II「授業の設計 2:(目標の手直しと) 方略」(60 分)
18:00	発表・全体討論 (50 分)
18:50	夕食 (40 分)
19:40	講演「クラーク博士とその教え子たちの言葉から」(藤田正一獣医学研究科教授)(30 分)
20:20	懇親会

2007 年 11 月 10 日 (土)

7:30	朝食
8:30	ミニレクチャー「評価」(30 分)
9:00	グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動 (10 分)
9:10	グループ作業 III「授業の設計 3:(方略の手直しと) 評価」(60 分)
10:10	発表・全体討論 (50 分) - 休憩 (10 分) -
11:10	参加者の個人的感想や意見 (50 分)
12:00	昼食 (60 分)
13:00	バス出発
14:30	J R 札幌駅北口到着

写真 9. 脇田稔副学長の挨拶

写真 10. アイスブレイキング

写真 11. グループ討論

写真 12. グループ討論内容の発表

写真 13. 細川教授のミニ講義

写真 14. 藤田教授の講演

一般教育演習 「北大キャンパスにうごめく命
(ムシからヒトまで)」
＜グループ D＞
特別講義 「学問とは何か～その相互関連と社会

でのつながり」
＜グループ E＞
特別講義 「環境問題を見つめ直す」

第 11 回 (2007 年 11 月) 教育ワークショップのプロダクト

(以下は、各グループの提出した成果である OHP と
記録を参照して、報告者がまとめたものである)

(2007 年 11 月) グループ A のシラバス

浅沼 敬子 (文学研究科), 新井 則義 (工学研究科), 鈴木 光次 (地球環境科学研究所),
岡田 敦美 (メディア・コミュニケーション研究院), 鈴木 正彦 (農学研究院),
上野 貢生 (電子科学研究所), 蒔田 芳男 (旭川医科大学)

＜科目設定＞

【科目名】 一般教育演習「格差と環境～便利さを求めた際の諸問題」

【一般目標】

- ① 現代世界の諸問題 (例: 格差, 地球温暖化, etc.) を知る。
- ② ①に対して主体的に考え, 対策を自ら考案し, 提示することができる。

【行動目標】

- ① 地球温暖化のメカニズムを理解することができる。
- ② 格差問題発生 of 歴史的, 政治経済的背景を知り, 解決策を提案することができる。
- ③ 適切な情報源から資料を収集し, まとめることができる。
- ④ 自ら企画, 立案し, プレゼンテーションを行うことができる。

＜方略＞

- ① 概要, 導入 (オリエンテーション)
- ② 技術革新の表と裏～講義資料提示
- ③ 地球温暖化の原因～ ”
- ④ グループ討論
- ⑤ プレゼンテーション
- ⑥ 世界の諸問題
- ⑦ グループ討論
- ⑧ プレゼンテーション
- ⑨ 知的財産
- ⑩ 環境問題への対策 (技術的)
- ⑪ 環境問題への対策 (文化的)

- ⑫ グループ討論
 - ⑬ プレゼンテーション
 - ⑭ 個人の発表, まとめ (先生の感想を含む)
- 講義において不明な点を調べ, 要点をまとめる。

<評価>

- ① 出席 30%
 - ② 個人発表 30%
 - ③ ポートフォリオ 40%
- ※「ポートフォリオ」に関しては, その内容が評価対象となる。

(2007 年 11 月) グループ B のシラバス

長谷川 千尋 (文学研究科), 信太 祐二 (工学研究科), 岡嶋 孝治 (情報科学研究科),
 廣川 淳 (地球環境科学研究所), 米田 明弘 (農学研究所),
 竹口 竜弥 (触媒科学研究センター), 塩谷 浩之 (室蘭工業大学)

<科目設定>

【科目名】 一般教育演習「エコロジー生活学」

【一般目標】

- ① 人間生活と科学技術の関係を理解する。
- ② 環境問題の歴史・現状を知る。
- ③ 自然と人の関わりを学ぶ

【行動目標】

- ① 自ら調査した内容をまとめ, 的確に表現することができる。
- ② 議論を通じて, 自らの理解を深め, 文章としてまとめることができる。
- ③ 北海道の自然と人間の関わりを通じてエコロジー生活を提言できる。

<方略>

- ① 総論 科学の発展と人間生活
- ② 省エネルギー
- ③ 事例調査と議論: レポート
- ④ リサイクル
- ⑤ 事例調査と議論・レポート
- ⑥ 食の安全
- ⑦ 事例調査と議論・レポート
- ⑧ 農業
- ⑨ 事例調査と議論・レポート

- ⑩ 自然保護と観光
- ⑪ 事例調査と議論・レポート
- ⑫ 自然と人間のかかわり～森での生活
- ⑬ 事例調査と議論・レポート
- ⑭ エコロジー生活の心（総合討論）
- ⑮ まとめ～エコロジー生活の提言

<評価>

- ① 事例調査 30%
- ② レポート（6回） $6 \times 5\% = 30\%$
- ③ 討論への参加 30%
- ④ 最終レポート 10%

(2007年11月) グループCのシラバス

近藤 健一郎（教育学研究院），松本 高志（工学研究科），鈴木 育男（情報科学研究科），
松山 秀生（理学研究院），益子 竜弥（病院），森本 純子（遺伝子病制御研究所），
簗 耕司（旭川高専）

<科目設定>

【科目名】 一般教育演習「体験型異文化理解」

【概要】 日本人学生を対象に，外国の事前学習をし，TAの留学生と共に複数の国の体験を行う。

【一般目標】

真の国際人として通用するために，また多用な価値観を受け入れた日本で暮らし続けるために，異文化を学び実践し体得する。

【行動目標】

- ① 宗教を理解できる。（民族対立を理解できる。）
- ② 食文化を理解できる。
- ③ 各国のタブーを理解し，行動しないように身につける。
- ④ コミュニケーション（あいさつ，男女関係など）を理解し，実践できる。
- ⑤ Group work, Group study を通して協調性を身につけ，presentation skill を身につけることができる。

<方略>

- ① 総ガイダンス（講義の概要とグループ分け）
- ② アメリカについてTAより講義
- ③ 中国についてTAより講義

- ④ 韓国について TA より講義
 - ⑤ イスラム圏諸国について TA より講義
 - ⑥ ロシア, インドについて TA より講義
 - ⑦ アフリカ, ヨーロッパ諸国について TA より講義
 - ⑧ ～⑬ 小グループ (4 つ) に分かれ, テーマ (行動目標①～④) に対し, TA とディスカッション。また, 発表の準備を行う。
 - ⑭ ⑮ テーマに対し, 2 つのグループが発表 (発表 30 分 質疑応答 10 ～ 15 分)。
- ※ 実地体験については TA と一緒に時間外に施行。
 ※ 各人ポートフォリオを作成し, 最終講義後に提出し, 評価する。
 ※ 予習は, 8 ～ 13 の講義に際し各人が行う。

<評価>

方法	項目 ① ～ ④	評価者	比重
出欠			2/3 以上の出席
レポート	第 2 ～ 7 回目の講義について 質問形式でまとめて提出する。 (項目 ① ～ ④について)	TA	20%
Group プレゼン	① ～ ④ のいずれかと ⑤	教員 学生	20% 10%
Personal プレゼン	① ～ ④ のいずれか	教員	10%
PF	① ～ ④	教員	40%

(2007 年 11 月) グループ D のシラバス

吉田 隆行 (医学研究科), 寸田 祐嗣 (獣医学研究科), 平松 尚志 (水産科学研究院),
 水谷 武臣 (先端生命科学研究院), 日高 宏 (低温科学研究所),
 高橋 彩 (留学生センター), 橋本 久穂 (苫小牧高専)

<科目設定>

【科目名】 総合科目「環境と人間～持続可能な人と生物の共生のために」

【一般目標】

持続可能な人と生物の共生のために地球環境をとりまく諸問題の現状を把握する。

【行動目標】

- 地球環境をとりまく現状について説明できる。
- 対策について政策提言し、議論できる。
- 日常生活でのとりくみについて提案し実践できる。

<方略>

2単位、2年次 or 3年次に選択（他の環境系講義をとってから）

- ① 生態学（エコトキシコロジー）概論
- ② 環境汚染物質の動態
- ③ 地球環境破壊
- ④ グループ学習（グループ分け，意見交換，資料収集）～文献検索等専門家による指導
- ⑤ 専門家～エネルギーと経済：経済省
- ⑥ 化学物質：コルボーン氏
- ⑦ 環境破壊：写真家（ナショナルジオグラフィック）
- ⑧ “もったいない”資源の節約：“もったいない”の人
- ⑨ 食の安全：内閣府食品安全委員会
- ⑩ 地球温暖化～地球にやさしい車の開発：ホンダ
- ⑪ 地球温暖化：ゴア「不都合な真実」
- ⑫ テーマの発表とプレゼン準備（TA サポート）
- ⑬ ”
- ⑭ 発表と投票
- ⑮ 提言の確定

※ ⑤ ～ ⑪ 講義 60 分，グループ学習 30 分。

最終的に学生各自：ポートフォリオ

<評価>

① 評価項目

- 地球環境をとりまく現状を説明できるか？
- グループディスカッションに積極的に参加したか？（議論に貢献したか？）
- 日常生活で環境問題に対する取り組みを実践したか？

② 評価方法

- a. ポートフォリオ (80%)：個人評価
出席，議論への貢献度，理解度，実践
- b. 発表会 (20%)：グループ評価

ポートフォリオ第1回～3回

氏名： _____ 日付： _____

総合科目「持続可能な人と生物の共生のために」

- ◆受講前の私の理解
- ◆受講後の私の理解
- ◆特に興味を持った問題・感想など

ポートフォリオ第4回

- ◆受講前の私の理解
- ◆受講後の私の理解
- ◆特に興味を持った問題・感想など

グループ名：

役割分担：

全体内容・自分の発言：

感想：

ポートフォリオ第5回～11回

- ◆受講前の私の理解
- ◆受講後の私の理解
- ◆特に興味を持った問題・感想
- ◆グループ内の議論内容・自分の発言

ポートフォリオ第12,13回

- ◆グループ内の議論内容・自分の発言

ポートフォリオ第14回

- ◆各グループの発表の要約と感想
- ◆各グループの発表の評価

ポートフォリオ第15回

- ◆議論の内容・私の発言・感想

※各ポートフォリオには～新聞切り抜き等，資料とその出典も入れる。

～「私の実践の記録」等も入れる。

(2007年11月) グループEのシラバス

阿部 薫明 (歯学研究科), 玄 武岩 (メディア・コミュニケーション研究院),
丸山 英男 (水産科学研究院), 湯浅 万紀子 (総合博物館), 佐藤 譲 (電子科学研究所),
海老名 尚 (北海道教育大学), 土持 法一 (弘前大学)

<科目設定>

【科目名】 大学院共通授業「北海道大学発信の新環境学特論」

【一般目標】

持続可能な社会を実現する為に、環境に対する学際的な理解を深める。

【行動目標】

- ① 環境に関する各領域のとりくみを理解する。
- ② 身近なところから環境を考える事ができる。
- ③ 環境問題を通して、グループディスカッションおよびプレゼンテーションスキルの向上をはかると共に、協調性を身につける。
- ④ 自己評価および他者への評価を行う能力を身につけることができる。

<方略>

- ① 基調講演，オリエンテーション → コーディネーター
 - ② ～ ⑦ 講演（その準備，コーディネート）→ 各部局より講師
 - ⑧，⑨ グループディスカッション → TA 学の活用
 - ⑩ 中間発表会
 - ⑪ ～ ⑬ プレゼンテーション準備 → 科学コミュニケーション講座 (CoSTEP) 等の協力
 - ⑭ 総括・討議・反省会 → コーディネーター，特別講師
- ※ + α として，一般公開発表会（総合博物館など）

<評価>

- ① 内部発表会でのコーディネーター・講師の評価 30%
- ② 貢献度（コーディネーター・TA・etc.） 20%
- ③ ポートフォリオ 50%

※ポートフォリオ

（自己評価 15%，アンケートの分析 20%，講義へのレポート 15%）

4. ワークショップの参加者アンケートの結果（1999 年度との比較）

2007 年度の 2 回の教育ワークショップにおいても，ワークショップの総合評価に関するアンケート調査を行った。

高等教育機能開発総合センターの「センターニュース」33 号（1999 年 12 月）には，新しい試みである FD 活動がどのようなものであるか示すために，1999 年度の「第 2 回教育ワークショップ」

の参加者たちによる詳しい評価が掲載されている。そこでのアンケート結果と，いくつかの項目について比較してみる（表 4）。

これらのワークショップのあいだには，開催時期に 8 年間の違いがあり，第 2 回ではまだ教育ワークショップは学内でまだあまり認知されていなかったが，2007 年度までには既に全参加者数が北海道大学内で 300 名近くになっている。また，参加者層にも違いがある。第 2 回のときの研修参加者は各部局の教育に責任を持つ教務委員の方が大半で年齢的には 40 代～50 代であったが，2007 年度の 2 回の参

加者は北海道大学に赴任して5年以内の助教以上の教員が主な対象なので、年齢と教育経験がかなり違う。さらに、ワークショップの内容と時間についてみれば、1泊2日はどれも同じであるが、1999年度ではグループ討論が5セッションあり2日目の帰りも遅かったが、2007年度ではグループ討論を3セッションにし2日目午前に終了というように軽減している。それでも、2007年度の11月の第11回には夕食後に講演が1つ組み込まれていて、6月の第10回よりも少しハードである。このようにして、ワークショップのハードさに差があり、ハードさの順で言えば、第2回が最もハードであり、その次に、第11回、一番軽いのが第10回ということになる。

ここでは、表3のように3つの質問のみにについて比較してみた。

「このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか？」という質問への回答における「きわめて」と「かなり」の合計は、第2回の46%、第11回の39%、第10回の34%の順であるが、これはプログラムのハードさ（内容量と時間）の順と同じになっている。内容が多い場合には、ハードではあるが、聞いてみたい、学んでみたいと期待していたものが含まれている可能性が高いからとも解釈できる。

「このワークショップで示された教育学的方法を今後取り入れようと思いますか？」という質問への

表4. 第2回（1999年度）、第10回（2007年6月）、第11回（2007年度11月）の比較

○このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか？

	第2回	第10回	第11回
・きわめて適切	7%	5%	12%
・かなり適切	39%	29%	27%
・ある程度適切	50%	58%	40%
・やや適切	16%	8%	18%
・全く不適切	0%	0%	3%

○このワークショップで示された教育学的方法を今後取り入れようと思いますか？

	第2回	第10回	第11回
・大いに取り入れたい	7%	21%	12%
・かなり取り入れたい	28%	42%	42%
・少し取り入れたい	65%	34%	43%
・余り取り入れようと思わない	0%	3%	3%
・全く取り入れようと思わない	0%	0%	0%

○今後ともこういうワークショップを持つべきか？

	第2回	第10回	第11回
・ぜひ持つべきである	16%	34%	15%
・持つほうがよい	44%	37%	27%
・持ってもよい	30%	24%	55%
・特に持たなくてよい	10%	5%	3%
・反対	0%	0%	0%

回答における「大いに」と「かなり」の合計は、第2回の35%に比較すると、第11回の54%、第10回の63%の順で増加しているが、これは第10回と第11回の研修参加者が若くて教育経験が少ないということと、若さからくる新しいものを取り入れる柔軟性があることによるとと思われる。

「今後ともこういうワークショップを持つべきか?」という質問への回答における「ぜひ」と「持つ方がよい」の合計は、第2回は60%であったが、2007年度の第10回の71%と第11回の42%では大きな差が出ている。しかしよく見ると、その差は第11回は55%の参加者が「持ってもよい」と回答しているので、そんなに大差であるということでも

ないともいえる。今年度の2回のこの質問に対する回答の相違の理由は、多いに気がかりなことであるが、来年度もワークショップを2回行うので、そのアンケート結果などから次第に明らかになるものと考えている。

以上、1999年度の第2回と、2007年度の第10回と第11回の参加者のアンケートに対する回答を比較してみた。北海道大学の次世代FD活動の中では、この「教育ワークショップ」は、新任の教員あるいはセンター／研究所のような小部局の教員を対象とすることになっていて、各部局で開始されるであろうFD活動と並立するものと位置づけられる。